



©정주하 鄭周河 2012

高麗博物館2017年企画展示

奪われた野にも 春は来るか

フクシマを考える

2017.2.1(水)~4.30(日)

開館時間 / 12:00~17:00

休館日/月曜・火曜

入場料/一般400円、中高生200円

協力: アウシュヴィッツ平和博物館、松本市浅間温泉神宮寺

写真展ブログ: <http://ubawaretanonimo.blog.fc2.com>

東京都新宿区大久保 1-12-1 第二韓国広場ビル7F

TEL: 03-5272-3510

市民がつくる日本コリア交流の歴史博物館

認定NPO法人



高麗博物館
고려박물관 KOREA MUSEUM

講演会

2.18(土) 14:00~16:30

鄭周河 (作家/韓国百済芸術大学教授)

フクシマの日常を撮る——『噛まれた舌の痛み』

4.8(土) 14:00~16:30

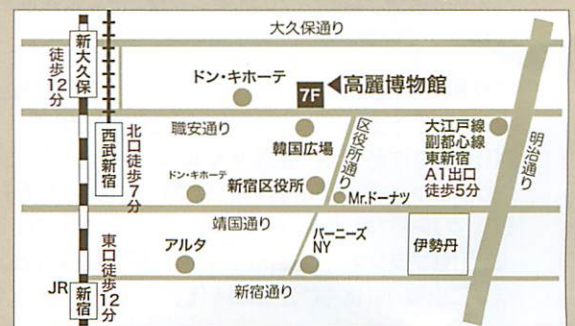
徐京植 (作家/東京経済大学教授)

フクシマ以後の生とは?——『少数者の立場から』

講演会+入場料/1000円

要予約 ⇒ 03-5272-3510

⇒ kourai@mx7.ttcn.ne.jp



奪われた野にも 春は来るか

鄭周河^{チョンジュハ}写真展

鄭周河さんは韓国の大学で教鞭を執るかたわら韓国内の原発とその周辺に暮らす人々の日常を撮り続け、2008年に「不安、火-中」というタイトルで発表しました。東日本大震災に端を発する原発事故後は福島にも足を運び、その情景を写した作品をソウルで展示しました。そして日本でも2013～2014年に、南相馬市立中央図書館をかわきりに全国6か所で写真展が開催されてきました。

このたび高麗博物館は「奪われた野にも春は来るか」展を開催します。このタイトルは日本が朝鮮を植民地にしていた時代の1926年、詩人李相和がつづった詩の題名です。

原発事故から5年以上たった今も、多くの方が避難生活を強いられ、放射能汚染の問題も未だ解決されていません。「野」には人影もなく、それでも巡りくる四季の風景は美しい。植民地朝鮮の土地を奪われた人々と、放射能の汚染により、豊かな日々が奪われてしまった福島の人々を重ね合わせ、その怒り、痛み、苦しみを共有したいと思います。

歴史をきちんと見つめ、今の韓国、日本における原発の現実と事実を覆い隠そうとする風潮に対して、何が必要か、鄭周河さんの静かな写真は私たちに問いかけています。



講演会 ○入場料/1000円 ○要予約/03-5272-3510/kourai@mx7.ttcn.ne.jp

2.18(土) 14:00～16:30 スライドでの作品紹介あり

フクシマの日常を撮る——『噛まれた舌の痛み』

4.8(土) 14:00～16:30

フクシマ以後の生とは?——『少数者の立場から』

鄭周河(チョンジュハ) プロフィール

1958年 韓国仁川生まれ。写真家。
1990年 ドイツ、ケルン大学自由芸術学部大学院終了。
1992年 Prof. Arno Jansen のもとでマスター学位取得。
1996年より、韓国百済芸術大学写真科教授。
2004年より、韓国の、2011年より福島、の、原発周辺の「日常」を撮り続けている。

写真集:「大地の声 땅의 소리」(1999)、「西方の海 서쪽바다」(2004)、「不安、火-中 불안,불-안」(2008) など。
2016年の作品展示: 鄭周河写真展「奪われた野にも春は来るか」アウシュヴィッツ平和博物館(福島)、神宮寺(長野)、和の家(長野)。グループ展「Beau et Discret, Korea On/Off」Cit  internationale des arts(フランス)、釜山市立美術館展(韓国)など。
テレビ出演:NHK「こころの時代」

徐京植(ソキョンシク) プロフィール

1951年 京都生まれ。作家・東京経済大学教授。
2011年 原発事故後まもなく福島を訪れ、少数者のまなざしからフクシマを語る。鄭周河さんの視察にも協力。
2013～14年、全国6カ所で行われた鄭周河写真展「奪われた野にも春は来るか」の実行委員の一人。

著書:「私の西洋美術巡礼」(みすず書房)、「ディアスポラ紀行 追放された者のまなざし」(岩波新書)、「中学生の質問箱 在日朝鮮人ってどんなひと?」(平凡社)、「フクシマを歩いて ディアスポラの眼から」(毎日新聞社)、「フクシマ以後の思想をもとめて」(平凡社)、「詩の力」(高文研)、「越境画廊」(論創社)、「抵抗する知性のための19講」(晃洋書房)、ほか多数。高橋哲哉氏との共編著:「奪われた野にも春は来るか 鄭周河写真展の記録」(高文研) テレビ出演: NHK「日曜美術館」、「こころの時代」ほか多数。